◆障害学生の修学支援・Ⅱ◆

第一二回　居心地の良い大学

筑波技術大学教授　石田久之

昨年秋、日本福祉大学は、「学生とともにすすめる障害学生支援」という特色GPの報告会を開催しました。一連のプログラムを終了しての成果報告会ですが、その席でお話しさせていただいた内容を以下にまとめました。

学び・成長を意識することの難しさ

最初はひたすらこなす。障害学生や修学支援との係わりの最初は様々だと思います。上司の指示で（職員）、たまたま授業で隣り合わせて（学生）、支援委員会の委員になって（教員）、などなど、偶然の機会で、というのが多いのではないでしょうか。しかし一度、そのような世界に足を踏み入れると、まずは、「何とかしてあげたい」という気持ちになるのは、立場は違っても同じだと思います。とにかく、他の学生と同じように授業を受けてもらうには、同じように連絡事項を提供するには、そして障害学生にもきちっと分かる授業を展開するには、と一所懸命努力するわけで、その先のことを考える余裕はありません。

私も三年前にこの事業に参加した時は、とにかく、各大学の支援の実態はどうなのか、何を整備しているのか、何を行なっているのかという、目に見える部分だけを追っていたような気がします。

何か違う。しかし、いくつかの大学を訪問し、おぼろげながら我が国の修学支援の実態が分かるにつれて、今度は大学間の比較ということを心の中でするようになります。この大学はこの部分は進んでいるとか、この件についてはこの前の大学が素晴らしいとか、というようなことです。こう書くと、そんな目で見ているのかと怒られるかも知れませんが、一応私も研究者なので、「比較研究」というようなことはお許し願いたいと思います。この比較ですが、最初は量的なものについてです。ノートテイカーが何人いるとか、何コマ行なっているとかということです。

しかし、どうもそれだけでは違いを説明できない何かがある。何か違うんだけど、何か分からない。

外注したら。その答えがある時わかりました。ノートテイカーが足りなくて困っているが、どうしたらよいかという議論をしていた時でした。ある大学は、学内で養成しているのだが、それが大変、またなかなか支援学生として独り立ちできないというような話をしているとき、うちはそのような面倒なことはせず、全て外部のリソースを使っています、という発言がありました。

これを聞いて、「うん、ここだ」と得心しました。学生を育てるという活動、その中で、どうしたらうまく育てられるかという自分への問いかけ、など、係わる様々な人々の成長、学びという意識が、明確にあるかないかが、大きな違いであることに思い至りました。

支援業務の外注自体は、悪いことだとは思いません。むしろ必要な場合もあります。しかしお互いが支え合い、学び合うという気持ちを最初から捨て去っていては、障害学生が本当に望む支援、結局は人間と人間との係わり合いの中での支援というものはできないと思います。大学という教育の場での障害者支援とは何か、そこに思いをめぐらすか否か、これらは大学の質と不可分ですが、同時に、それらを意識することの難しさも小さくないのです。

同じという感覚を持つことの難しさ

支援する者とされる者。前節の結論を受けると、支援学生や教職員と障害学生との関係は、支援する者と支援される者ではありますが、一方向性ではないということになります。支援学生と障害学生は、同じ学生です。お互いに影響しあうことに何の不思議もありません。支援とは、障害学生の不自由な部分だけを補うものであり、全人格を面倒みるということではありません。当然のこと、支援以外の部分では、支援学生が障害学生に相談するという場合もあるわけです。

立場の逆転はいつでも生じる。私の所属する筑波技術大学では、学生のほとんどが学生宿舎に入っています。盲と弱視の学生が一緒に生活しているわけです。年に何度か避難訓練が行なわれますが、その時冗談半分で、こんなことを言います。「普段は、盲の学生が手引きをされているけれども、夜、停電の中で避難する時は、逆に、弱視の学生が手引きされるかも知れない。よくお願いしておきなさい」と。立場の逆転はいつでも生じます。してあげているんだよという、偉そうな態度・考え方は、禁物です。特に教員の場合、授業で特別な配慮をしてあげているんだよと考える方も少なくないようですが、あらかじめの資料配布など障害学生に分かりやすい授業は、健常学生にも分かりやすいのです。学生に違いはありません。しかし、こういう同じという感覚を持つこともかなり難しいことです。

青年海外協力隊を志望したい。私が授業を担当した学生の一人（弱視学生）が、青年海外協力隊で活動してみたいと言ってきました。今すぐにということではないのですが、大学を卒業してから、学んだことを海外の視覚障害者のた

めに役立てたいと言うのです。過去にこういうことを言う学生はあまりいなかったので、ちょっとびっくりしました。しかし、障害があっても他者の役に立つことはいくらでもできます。障害者＝支援を受ける人、というばかりではないはずです。むしろ障害者だから分かる他者への配慮というのもあると思います。こういう中でこそ、同じという感覚が、実態を持って周りの人から受け入れられるのではないでしょうか。

支援と自立のバランスの難しさ

スタートを揃えるための支援。よく、「特別な配慮」をお願いしますと言いますが、この「特別な配慮」とは、障害学生に優位性を与えるものではありません。見えない・見にくい・聞こえない・聞こえにくい・動きにくい、などのハンディキャップに手を貸し、他の学生と一緒のスタートラインに立つための配慮を、ということです。下駄を履かせたり、情報を特別に多く提供したりすることではありません。この辺を十分に理解していただかないと「一人の学生を特別扱いはできない」というような「正論」で、論破されてしまいます。

学業自立と職業自立。自立と支援とは、相対立するものではありません。他方が多くなったり、少なくなったりしながら、必要な自立性を獲得していくものだと思います。と、概ねは理解しているのですが、やはり、どこまで支援を、どこからは自分で行なってもらう、ということを判断するのは難しいことです。「その時々、個人によってですね」と言わざるを得ません。

ただ、一つだけ確かなことは、その判断を一人でしないということです。本人とも話し、周りの支援者などとできる限り相談すべきです。「それは、支援担当職員の仕事」と周りは見ているかもしれませんが、支援は一人ではできません。いろいろな方に相談し、グループで対応を考えることが必要です。

さて、大学ですから、学内の授業保障を中心とした支援が中心となるのは当然です。その支援も学年が上がるにつれ、変わることもあります。例えば、聴覚障害学生の支援として、一・二年の講義中心の授業にはノートテイカーを配置し、三・四年の専門的なゼミには手話通訳を入れるなどです。このようにしながら、障害学生は支援の受け方を学び、同時に学習における自立性を得ていくわけです。

他方、社会において、働くことへの支援は、大学の中の支援の様相とは違います。全くないということも稀ではありません。このような中で自己を主張していくことはとても難しいことですが、学生を送り出す大学としては、それ

らのことも考える必要があると思います。教育の場から労働の場へ、いわゆる「移行」に伴う支援をどうするのか、障害学生支援の大きな課題となるでしょう。

ベッドで寝ながら授業は受けられないのか。少し極端な例を考えてみましょう。在籍中に事故で四肢麻痺や重度の肢体不自由になった学生がいるというのは、時々お聞きします。しかし、ベッドに横になったまま、起き上がることができない学生に授業は可能でしょうか。病室に教員が来てというのではなく、教室での授業です。

通常授業というのは、暗黙のうちに、通学し、教室に来、着席し、授業を聞き、ノートを取り、時間がくれば教室を出るという、一連の動きが想定されています。この中で、車椅子での移動が困難ならスロープを整備しましょう、先生の話が聞き取れないのであれば、ノートテイクを付けましょうということになります。そしてそれらを整備しますから、後は一人で学習してください、というのが、支援の考え方で、自立ということです。しかし、先ほどの一人で大学に来られない、ベッドから起きられないので着席もできない、ノートも取れない、質問もできないという学生に授業は可能でしょうか。

勿論、障害の状況、本人の意思、大学の考え方・支援能力、周囲の支援容量などにもよりますが、少なくとも、最初から「否」というべきではないと私は考えます。支援なしではほとんど何もできないから、というのは学習の機会を提供しない正当な理由にはなりません。まず大事にしなければならないのは、本人の意思・意欲、そして能力です。

最近、よく使う言葉

大学の品格。以前、評判になった本の題名が記憶にあったのか、最近、「大学の品格」という言葉をよく使います。私は、規模が大きいとか、政治家や有名人を数多く輩出している大学に品格があると思っているわけではありません。そうではなくて、冒頭に書きましたが、教職員・学生がお互いに刺激し合い、学び・成長することを意識して進めている大学。これを、品格のある大学だと考えています。学び・成長という言葉は、何か面はゆい、照れくさい言葉ですが、教育実践の場である大学で、忘れられてはいけない言葉ですし、これを常に意識する大学こそ品格ある大学だと思います。

居心地の良い大学。さて、結論です。障害学生への支援の数々は、健常学生にも教職員にも有益なものです。これはすなわち、ユニバーサルアクセスに他ならず、私は「居心地の良い大学」を目指す実践と考えています。

二年間、お付き合いいただき、ありがとうございました。